

第22回

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 **FASiD**

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第22回(2018年度)の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。

娘たちのいない村

ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌



堀江未央 著

〈女性不在世界〉に渦巻く
夢と欲と葛藤の現実を多り出し、
結婚移動研究に新風を吹かせる

堀江 未央 著

『娘たちのいない村

—ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』

(京都大学学術出版会) 2018年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著 『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原 洋之介著 『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著 『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著 『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著 『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著 『現代アフリカと開発経済学—市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著 『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川 潤著 『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著 『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著 『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原 毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動: 貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著 『村の暮らしと砒素汚染—バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロナル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著 『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著 『経済大国インドネシア—21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著 『障害と開発の実証分析—社会モデルの観点から』勁草書房 2013年
- 山尾 大著 『紛争と国家建設—戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年
- 第18回 柳澤 悠著 『現代インド経済—発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会 2014年
- 第19回 古川光明著 『国際援助システムとアフリカ—ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社 2014年
- 第20回 宮城大蔵編著 『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房 2015年
- 第21回 田中由美子著 『「近代化」は女性の地位をどう変えたか—タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』新評論 2016年
- 佐藤 仁著 『野蠻から生存の開発論—越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房 2016年

審査委員選評

中国では、一人っ子政策の結果として男児が相対的に増え、跡継ぎとなる男児を望む漢族の農村では深刻な嫁不足が起きている。漢族と少数民族の経済格差も大きい。これを背景に西南の少数民族地域から華東・中南農村地域への女性の婚姻移動が見られ、「娘たちのいない村」が増えている。

本書は、中国雲南省の少数民族のラフ村落からの女性の婚姻移動の動態を、彼女達を送り出す社会における家族やジェンダー観の変化、女性の位置づけと婚姻のあり方の変化、すなわち「送り出し社会の論理」に着目して解明している。移動を生み出す要素を探ると同時に、出身村落での女性達の夢と迷い、葛藤と逡巡、時には自ら望んで、ときには騙されつつ村を出る決断をする未婚の娘や若い妻達の心の動きが描き出されている。

本書は、ミクロなレベルの文化人類学的研究であるが、一人っ子政策や対外経済開放といった国家レベルの政策が辺境の村に及ぼす社会的影響を感じさせる研究でもある。中国国内でのラフ族の村から漢族の村へ、そこから都市への女性の移動が、ミャンマーのラフ族の中国ラフ族の村への女性の国際的な移動連鎖を引き起こしているとの指摘も興味深い。

外国人によるフィールドワークが困難な中国において、辺境に単身で2年半住み込み、村の人々の信頼を得ながら調査をやり抜いた粘り強さと好奇心は賞賛に値する。方法論的にも、エスノエージェンシー理論という手法を用いて、少数民族の女性の移動に伴う婚姻や人格観念の流動性や多重性を描き、オリジナリティーの高い人類学的研究となっている。ほかの地域における同種の研究や、ほかのタイプの越境移動、例えば難民研究にも適用できるだろう。

文章は読みやすく、興味深い写真も多く、人類学だけでなく開発問題や人の移動問題に関心のある研究者や学生に勧めたい。新進気鋭の著者が、大来賞受賞を機に更なる飛躍をとげることを期待したい。(滝澤 三郎)

受賞者の言葉

このたび、大来賞という名誉ある賞をいただきましたこと、たいへん光栄に思います。選考委員の先生方、これまでご指導いただいた先生方、出版にご尽力くださった京都大学学術出版会の鈴木哲也さま、その他本書の執筆を支えてくださった方々に心からお礼を申し上げます。なかでも、本書のもととなった博士論文を指導してくださった京都大学の速水洋子先生、本書の主人公である、P村に暮らすラフの人々、そして本書の執筆中にわたしのものとへやってきてくれた娘に受賞の報告ができますことを心より嬉しく思います。

本書が取り扱う、中国におけるヨメ不足の連鎖が生み出した女性の婚姻移動という問題は、わたしが調査地でフィールドワークを行うなかで知ることになった問題です。本課題についての予備知識もないままに実施した調査を元に行っているため、政治経済的な資料や分析にはまだまだ未熟なところがあるかと思えます。国際開発に関わる賞をいただけることになったという一報を耳にした際も、喜びと同時に、意外さをぬぐえなかったのも正直なところ。中国のもっとも周縁部に位置するラフ族の一農村から、中国全土および隣接国に通底して起こっている問題を扱えることができたことが、評価いただけた理由でしょうか。本書は政治経済的・法的な分析において甘さが残る一方、「社会問題」としての下調べをしていなかったからこそ、女性の流出する社会の人々が感じる様子を素直に描くことができたと思っています。

私が調査研究を行う中国雲南省は、東南アジアとの国境に接し、政府の正式な許可を取ってフィールドワークを行うことが容易ではありません。なかでも私の調査地はミャンマーとの国境に近く、かつてアヘンの栽培が行われていた地域であったこともあり、調査の非常に困難な場所でした。調査許可の申請を行ったまま、いつ届くかも分からない連絡を待ちながら何ヶ月も省都の昆明で過ごすしかなかった時期は、本当に苦しいものでした。そのぶん、晴れて村に行けることが分かった日には嬉しさのあまり眠れないこともしばしばでした。

本書のもととなったフィールドワークは非常な困難を伴うものでしたが、そうであったからこそ、私の人生にとって最も実り豊かな幸せな日々でした。このように言うと先達の先生方にしかられるかもしれませんが、20代後半という時期をP村で暮らすことができ、毎夜ラフの人々と酒を交わしながら様々な話に耳を傾けることのできた、人生において最良の時間の結晶が、このような栄誉ある賞としてご評価いただきましたこと、とても感慨深いです。今後、本書の提起した問題に関連して、女性を受け入れる社会の事情、新たな女性の移動元となりつつあるミャンマーの様子など、明らかにすべきことは多々ありますが、本受賞を推進力として、さらに邁進して参りたいと思います。このたびは本当にありがとうございました。

堀江 未央



ほりえ みお

1983年大阪府生まれ。2015年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了、博士(地域研究)。京都大学東南アジア研究所連携研究員を経て、現在、名古屋大学高等研究院特任助教。

主要著書

「中国雲南省ラフ族女性の遠隔地婚出―ラフ社会における結婚との関わりに着目して」『東南アジア研究』52巻1号(2014年)、「ヨメ不足の連鎖がもたらす女性の移動と越境―中国・ミャンマー国境域におけるラフ女性の事例から」『旅の文化研究所研究報告』No. 26(2016年)、「[研究動向] 女性の越境移動研究の展開―アジアにおける婚姻移動を中心に」『社会人類学年報』第43号、145-163頁(2017年)他。

第22回 応募作品の傾向と選考経緯

2017年4月から2018年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、56作品の推薦・応募があった。

本年度は昨年迄につづき、対象地域としては一国のみではなく、複数の国／地域を取扱う著作が多かった。アジアを取扱う作品は引続き多く、昨年度それまでの増加から減少へと転じた中国関係は3作へ増加した。アフリカ地域についてはコンゴ、ガーナ、ソマリア、南スーダン等一国を取扱う作品が多かった。中東・欧州・ラテンアメリカについては各1作であった。

分野については、環境／資源の9作への増加が著しかった。開発一般8作、経済／財政の5作は例年同様に多かった。災害／防災／難民の5作は経済等と同数であるが、増加が著しかったことは今年の特徴であった。人類学／民族学、政治の各4作がそれに続いた。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて下記5作が最終審査対象として選出された。審査者からは、「今期も、読み応えのある重量級の本が多かった。」と総評が出された。審査過程における委員による意見はおおよそ以下のとおりである。（書名五十音順）

『グローバルな正義-国境を越えた分配的正義』（上原 堅司著、風行社）は、従来の社会正義論を超えた「グローバルな正義論」という発想から論じ、国際的な分配的正義と実現するための援助の役割を提唱している点は、国際開発の意義を理論的に探る知的研究として評価される。英文論考の発刊をも期待したい。

『国際的難民保護と負担分担-新たな難民政策の可能性を求めて』（杉木 明子著、法律文化社）は、日本における難民をめぐる言説が「難民認定問題」に矮小化される中で、また国連において「難民グローバルコンパクト」が採択されるタイミングで、難民の救済という国際公共財の費用分担問題に立ち向かった点が評価できる。

『抵抗と創造の森アマゾン-持続的な開発と民衆の運動』（小池 洋一・田村 梨花編著、現代企画室）は、世界最大の熱帯雨林を有するアマゾンの森林減少は、地球環境を守るうえでの大きな課題である。その多様な取り組みをわかりやすく紹介しており、今後の森林保護活動への優れた指針となろう。

『東アジアの新しい地域主義と市民社会-ヘゲモニーと規範の批判的地域主義アプローチ』（五十嵐 誠一著、勁草書房）は、様々な国際関係理論の検討から生み出された独自の分析視座に立って、東アジアの地域主義の進展における市民社会の役割を実証的に検証し、その限界と可能性を示した優れた作品である。

『有資源国の経済学-アフリカのいま』（中臣 久著、日本評論社）は、アフリカでは鉱物資源の有効利用が発展の重要な要素となる一方で、無資源国はどのような問題を抱えているのかにつき、様々な角度から分析している。外交官としての米国等およびアフリカ諸国勤務と、経済学の専門的知見に基づく指標分析を融合させた、アフリカに対する深い洞察が窺われる。

【第22回（2018年度）審査委員会】

委員長 杉下 恒夫（FASID 理事長）

委員 絵所 秀紀（法政大学名誉教授）

大野 泉（JICA 研究所 研究所長、政策研究大学院大学客員教授）

北野 尚宏（早稲田大学理工学術院国際理工学センター教授）

滝澤 三郎（認定 NPO 法人国連 UNHCR 協会理事長、東洋英和女学院大学院客員教授）

藤田 伸子（FASID 専務理事）

表彰式・記念講演会 ご案内

案内状	http://www.fasid.or.jp/award_detail/3_index_detail.shtml
日時	2018年12月20日（木） 13:00～15:00
講演	<p>男たちもいない村？ - 中国雲南省ラフ村落における人口流出とその行方 堀江 未央</p> <p>中国で一人っ子政策の廃止が宣言されて3年になりますが、この政策が運用された36年の歴史は重くと言わざるを得ません。現在もなお続く男女比の不均衡に加え、少子高齢化が中国に訪れつつあります。本講演では、中国における一人っ子政策と急激な経済成長が生み出した女性の移動の連鎖、それと平行して起こっている男性の出稼ぎによって、中高年のみが暮らしている西南中国のラフ村落とその行方について、本書の後日談をお話いたします。</p>
会場	<p>FASID セミナールーム（東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階）</p> <p>http://www.fasid.or.jp/about/8_index_detail.shtml（最寄駅：日比谷線神谷町、大江戸線赤羽橋）</p>
参加費	無料（要申込） 式典・講演に続いて懇談会を同会場で開催します。
締切り	2018年12月18日（火）（定員に達した時点で受付を終了します）
申込み	お名前・ふりがな、ご所属、電話（昼間連絡できる先）を事務局へemailにてお送りください。 FASID 国際開発研究 大来賞事務局（服部） email: okita@fasid.or.jp / Tel: 03-6809-1997

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。

第23回(2019年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2018年4月1日から2019年3月31日までの間に、初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎(おおきた さぶろう)氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

表彰 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。

審査 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募

推薦者(自薦・他薦可)は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付にて送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、推薦書類・当該図書は返却しませんのであらかじめご了承ください。

推薦書 ダウンロードしてください。

http://www.fasid.or.jp/award_detail/2_index_detail.shtml

締切 2019年5月末頃

受賞作品の発表と表彰式

2019年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。(予定)

推薦・お問合せ先

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究大来賞 事務局(服部)

TEL: 03-6809-1997 / email: okita@fasid.or.jp

本事業には公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究センター

国際開発研究 大来賞 事務局(服部)

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階

Foundation for Advanced Studies on International Development

email:okita@fasid.or.jp TEL:03-6809-1997 FAX:03-6809-1387 <http://www.fasid.or.jp>